



Title	補文化辞「か」と「と」の文法化
Author(s)	莊司, 育子
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 41-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50777">https://doi.org/10.18910/50777</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

## 補文化辞「か」と「と」の文法化

荘司 育子

### 1. はじめに

次のような表現の下線部に対する形態はどのように分析したらよいであろうか。

(1) 明日のお昼には各地で大雨になるかかと思います。

(2) 日本の学校にあるようなクラブ活動は、外国にはまずないとか。

まずは意味機能の上から、いわゆる疑問の助詞「か」と引用の助詞「と」との関連が想起されるであろう。また、このような「か」と「と」の助詞に相当する概念としては、「補文化辞」を挙げることができる。「補文化辞」は「補文標識」とも言われ、特に生成文法の分野では Complementizer として通用している概念であり、英語では主として ‘I think that ~’ ‘I wonder if/whether ~’ という構文に現れる that や if/whether のような非語彙範疇を指す。

例 (1) (2) に見える「か」と「と」をそれぞれ別個に捉えるならば、一見すると日本語には補文化辞が二つ現れているように見えなくもない。しかし、言葉の経済性から言って、そのように考えるのはあまり合理的とは思えない。本稿では、用言（述語）を受ける「か」と「と」は「補文化辞」であるのかどうかを考察することで、文末の「か」と「と」の統語的機能を明らかにしてみたい。

### 2. 日本語における「補文化辞」の再定義

#### 2.1. 機能語の性質

古来より日本語の語彙を意味機能の上で二大別する考え方があることは周知のとおりであり、「詞」と「辞」、「自立語」と「付属語」などがそれに当たる。それぞれの内容についてはいろいろに見解が分かれる部分もあるが、日本語以外の

言語でも「実質語（内容語）」と「機能語」、「語彙範疇」と「非語彙範疇」というような用語が用いられているように、語の意味機能上の特質に鑑みた二分類は比較的普遍的なものであると考えられる。日本語では後者（本稿では「機能語」と呼んでおく）に属するものは、諸説多少の異同はあるものの、一般には助詞、接続詞、助動詞の類いである。

機能語は、それ自体には事物、事態のもつ実質的な意味を備えておらず、もっぱら言語構成上の統語的關係や言語運用上の時空間における関係、メタ言語的性質をもった形式であると言える。したがって、言葉を言葉として表出するのに必要な、ある種の言語構成上の関係を表すための語であるから、機能語は実質語に比べ、主観的選択の幅をもたない機能の提示に徹するという点で、ストイックな標識である語とも言える。そのようなことから、同種の機能語は重複して表示されることはない。実際、(3) (4) に示すように、同種の機能的役割を果たす格助詞は二つ並べて表示されると、意味機能の矛盾や衝突が生じて非文となり、また、(5) (6) に示すように順接や逆接の接続詞も、話し言葉における言い換えや言いよどみを除いては、重ねて表示されると不適切な文となる。

(3) \*ゆうべ 魚 が・を 食べた。

(4) \*野山 に・で 遊ぶ。

(5) \*体温が上がる。だから・よって 発汗が促される。

(6) \*有効である。しかし・だが コストがかかる。

このように、機能語という、実質語と対極に立つ語群は、同種のものは重複して表示されないという語性を持つのだとすれば、機能語である補文化辞についても同様に、それが重複して表れることはないと予想される。そうすると、前掲の(1) (2) のように「か」と「と」が並んで表示されているものについては、少なくとも両者ともが補文化辞であるとするのは妥当ではないことになる。

## 2.2. 「文の終わり」ではないことを示す「補文化辞」

ここで、日本語における「補文化辞」という概念について再考してみたい。いわゆる SVO 型言語の英語などでは補文化辞は補文（埋め込み文）の前に位置するが、日本語のような膠着語は補文の後に補文化辞が置かれる。

(7) I asked him whether he came or not.

[田中君が来た] か (どうか) 聞いた。

(8) I think that he is fine.

[田中君は元気だ] と思う。

後に補文が導かれることを示す語が補文化辞であるならば、SOV型言語の日本語の場合は、補文化辞は「文の終わり」ではないことを示す標識であると言ってもよいであろう。つまり、線上に配置された語句の連続を解釈していく場合、主部に続いて用言(活用語)が見えた段階で、ひとまずそれが「文の終わり」であることを予想させる。しかし、連体修飾節において、あるいは接続助詞の類に導かれることによって、用言は文末(主文末)以外にも生起することがある。そのような場合、日本語では形式名詞や接続助詞、格助詞の類いが補文化辞の役割を果たし、当該の文がそこで終わっていない、つまりこの後さらに語句が後続し、それがまだ文形成の途中であることを示唆するものとなる。補文化辞は、SOV言語を文頭から語句を追って解釈していく際に必要不可欠な指標であると言えよう。補文化辞に対して、このような「文の終わり」ではないことを示す標識であるという役割を認めるとなると、日本語の場合には「か」と以外にも、用言を受ける機能語はいくつかあり、従来の一般的な見解よりも広く、補文化辞に相当する語を抽出できるものと思われる(拙稿(2012))。しかし、さしあたって「か」と「と」が補文化辞であるという点については議論の余地はないであろうから、ここではこれ以上の、補文化辞に相当する語についての検討は置いておくことにする。

本稿では、「か」と「と」のような、用言(連体形・終止形)を受ける機能語の語群を指す言葉として「補文化辞」を用い、「補文化辞」の語性として、それが「文の終わり」ではないことを示す標識であるとし、このような文末に付く助詞「か」と「と」についてさらに考察を進めていくことにする。

### 3. 疑問の助詞「か」と引用の助詞「と」

#### 3.1. 補文化辞の「か」と「と」

これまで、少なくとも「か」と「と」はいわゆる補文化辞に相当するものであることは通説になっている。さらに、前節で述べたように、日本語における補文

化辞の特徴は、「文の終わり」ではないことを示す標識である。補語となる補文に「か」と「と」のどちらを取るかは、述語動詞が選択することになっており、補文化辞「か」と「と」は自在に入れ替えることはできない。

(9) いつ行く か/\*と 知っていますか。

(10) いつ行く か\*／と 思いますか。

動詞の目的語に当たる補文に付くと言う意味では、「か」と「と」は似たような補文化辞であるが、一方で、構文上における振る舞いには違いがある。そもそも (9) の「か」においては、

(11) いつ行くかを知っていますか。

というように、格助詞「を」挿入することができるが、「思う」という動詞の目的語にあたる補文にはこのような「を」を取らない。

(12) \*いつ行くとを思いますか。

これは、「と」には格表示の機能があるために、格助詞「を」と共起させると、格表示機能が重複してしまうことによって非文になるものと考えられる。このようなことから、「と」は、「文の終わり」ではないことを示す補文化辞であることに加え、補語（目的語）を表す格表示も兼ね備えているということが言えよう。

では、翻って、前掲の例文についてはどのように解釈できるのだろうか。

(1) 明日のお昼には各地で大雨になるかと思います。

先に見たように、「思う」という動詞は「か」ではなく「と」の補文化辞を取るが、(1) では「か」と「と」が共起しているようにも見える。しかし、この「か」と「と」は、疑問語（「誰」、「何」などの WH 疑問詞にあたるもの）を含んだ補文には現れることができない。

(13) \*いつ大雨になるかと思いますか。

→ いつ大雨になると思いますか。

このように、「と」の補文においては、疑問語と文末の「か」が相容れるものではないことがわかる。それにしても (13) のような「と」の補文では、なぜ疑問語と「か」の共起を阻むのであろうか。言うまでもなく、「か」は疑問の助詞とも呼ばれるように、むしろ一般には疑問語との相性は良いものと理解されている。実際、(14) のように目的語の補文に補文化辞「か」を取る動詞「知る」の

場合は、たとえ格助詞「を」を補っても「か」がなければ非文となる。

(14) いつ大雨になるか／かを知っていますか。

→ \*いつ大雨になるをを知っていますか。

(13) における「か」と「と」は、両者とも「文の終わり」ではないことを示す補文化辞であるがゆえに、2.1. で述べたように、同類の機能語として重複しているような恰好となって、非文となると考えるのが妥当であると思われるのである。しかしながら一方で、冒頭で示したように、以下のように「か」と「と」が重複して標示されているような言語現象があるわけで、それについて説明せねばならない。

(1) 明日のお昼には各地で大雨になるかと思います。

(2) 日本の学校にあるようなクラブ活動は、外国にはまずないとか。

確かに「か」と「と」は補文化辞であり、典型的な機能語に属するものであるのだが、「文の終わり」ではないことを示すという統語的語性に起因して、これらは補文化辞より離れた語、すなわち終助詞の類いへと文法化していったものではないかと考えられる。次節ではその点についてさらに考察を進めていきたい。

### 3.2. 補文化辞のさらなる文法化

初めに結論を述べるならば、補文化辞はいずれ、終助詞化する運命にあるものであるということである。それはなぜかと言えば、結局「文の終わり」ではないことを示す、ということは、別の言い方をすれば、補文化辞は「文の終わり」のように見える述語末に位置するということである。述語末に置かれるということから、やがて、文末に置かれる終助詞（モダリティの要素を含む形式）へと再解釈される運命にあるのではないかというわけである。

実際、日本語ではさまざまな格助詞や接続助詞の類いが文末に位置して、一種のモダリティの要素のような、終助詞のごとく用いられる言語現象があることは、通時的にもよく観察されていることである。

(15) 無事に帰ってくればいいんだが。

(16) 自分でやればいいものを。

(17) 来ればいいのに。

(18) あなたは、もう、終わってますから。

(19) 彼ならもういませんけど。

(20) 私なら一人で行けるし。

格助詞に関して言えば、通時的な観点も付け加えるならば、動詞の連体形に直接格助詞が付く、準体法と呼ばれる用法があったために、格助詞はすべて動詞の連体形（現代語で言えば文終止の形）を受けることができるので、格助詞は一般に終助詞になる素質を有しているといえる。(15) (16) のような格助詞の代表とも言える「が」「を」をはじめ、現代語では「の」の挿入がなければ容認できないものではあるが、古代語ではありそうな (17) の「に」、そして、関西方言の「行くで」（行くよ）、九州方言の「行くと」（行くの）なども含めるのならば、格助詞に分類される助詞の類いは、ことごとく終助詞に同形のものが存在することが観察される。格助詞と終助詞が同形であることを偶然と考えるよりは、やはり、格助詞の音形に備わっている補文化辞としての要素に対して、Hopper and Traugott (1993) の言うような「再分析」「類推」が起こって文法化が起こったものと考えられるのではないだろうか。

また、接続助詞の例としては、(18) (19) (20) のようなものが挙げられる。これらは後文が省略されたものと考える向きもあるが、話し手及び聞き手の語感として、それが途中で終わった感がしない、つまり「文の終わり」であるという認識にまで到達していれば、十分に終助詞の仲間入りをしたと考えてもよいであろう。一方で、同じ接続助詞であっても、動詞の終止形（連体形）を承接しないものは、終助詞化しにくいことも観察される。

(21) \* 本文を読みつつ。

(22) \* 一人で歩きながら。

(23) \* 勉強しても。

このように、奇遇にも格助詞や接続助詞の類いに限ってなぜ終助詞化が起こるかと言えば、共通する要因として、それらが元々は統語的には終止形（連体形）に承接するものであり、「文の終わり」であるかに見える位置に生起する補文化辞であったからであり、補文化辞を経由することによって、終助詞化が起こりやすくなったのではないかと考えられるのである。

#### 4. 補文化辞の「か」「と」と終助詞の「か」「と」

一般に補文化辞と呼ばれている「か」と「と」には、実は、より純粋な補文化辞のままのものと、さらなる文法化によって、終助詞と化したものがあるのではないかと考えられる。ここでは、「か」と「と」に、補文化辞の「か」「と」と、終助詞の「か」「と」の二種を認めることで、ある「か」「と」に関する言語現象への説明が可能になるということを検証してみたい。なお、ここでいう終助詞とは、いわゆる「文の終わり」、つまり、述べまとめられた音の連続の文末に付加され、話し手の主観的な情意や聞き手に対する働きかけを表出する助詞のことである。

補文化辞は、本来は「文の終わり」ではないことを示すという、極めて機能的、統語的な性質しかもっていないものであるために、それがさらに文法化して終助詞になった場合には、情意にかかわる意味の内容は多岐にわたる傾向があることが指摘できる。つまり、終助詞「か」「と」の内包する意味機能は、より場面に依存するようなものであり、発話の場のイントネーションの如何で決まったりする傾向がある。終助詞「か」「と」の意味機能は、その形式自体に一律に備わっているものではないと考えられるため、それを抽出することはかなり困難であるように思われる。

補文化辞であった「か」が文法化して終助詞になったという例として、(24)にあるようないわゆる疑問の終助詞以外に、近年にも特異な用法が生まれたりなど、以下に挙げるようなさまざまな「か」の用法があることがわかる。文末の「か」が持つ意味合いを示すものを参考までに目安として後の括弧内に記す。(24)のいわゆる純粋な疑問の意味合いから派生するように、別の発話意図を帯びたものへと多岐にわたっていることが見て取れるであろう。以下の例文中、末尾の(↑)は、文末が上昇調イントネーションで、(↘)は下降調イントネーションで発話されることを示す。

- (24) 誰が委員長になると思いますか。(↑) (質問)
- (25) 普通、そんなこと言うか。(↑) (非難)
- (26) ふんっ、そんなこと、誰がやるか。(↘) (反語疑問)
- (27) あの非常ベルは避難訓練だったか。(↘) (納得)
- (28) ちょっと行ってみるか。(↘) (自問、開始の合図)

- (29) さっさと行かんか。(↘) (命令)  
 (30) おまえは、サルか。(↘) (嘲い)  
 (31) おじさんってかわいいね、か。(↘) (反芻)

このような現象を生むだけの素地がなぜ「か」にあるのか、という問いに答えるには、既に述べたように、「か」が補文化辞として文末に来る要素であること、そしてやがては、実際に文末に位置したままで、「文の終わり」となって文が中止してしまい、そこに、本来、後続するはずであった要素を類推しようとする形で、「か」にモダリティ的な終助詞の用法が備わる、という道筋を考えるのが合理的かと思われるのである。

一方、補文化辞「と」に関しても、このような「か」と非常に似たような現象がある。既に加藤（2010）、池谷（2011）でも指摘されているが、いわゆる引用の「と」が終助詞のように文末に位置し、なおかつ、それはもはや「引用」とは言いがたいような振る舞いをするものがある。

- (32) さあ、できたと。  
 (33) コンビニに行ってこようと。

上記のような例は、「と」に後続するべき引用動詞を補うことはできないのは明らかであり、もはや補文化辞の「と」ではなく、限りなく終助詞と化していると言ってもよいであろう。このような「と」についての意味機能を規定するのはなかなか容易ではないが、少なくとも直感的には、引用の助詞「と」から連想できそうなものであることは確かである。

このように、「か」と「と」は、基本として備わっている語性が、「文の終わり」ではないことを示す補文化辞であり、実質的な意味としては無色である機能語であるがゆえに、逆に言えば、実際の発話においてさまざまな意味の色合いを載せる余地があるのだと考えられる。特に終助詞「か」のもつ意味のバリエーションの多さは、このような事情に起因するものであろう。

日本語において、格助詞から接続助詞化し、それがさらに終助詞としてモダリティ化するという言語現象があることは多くで指摘されている（土井（1958）他）。しかしながら、従来の見解においては、なぜそのような過程を辿るのかという理由までは明らかになっていないように思われる。本稿では、それは「補文化辞」

を經由するからである、と考えることによって、文法化の過程が無理なく説明できるのではないかと主張するものである。

もし、この仮説が正しいとすれば、「か」は疑問の助詞と呼ばれるにもかかわらず、なぜ「か」の付加された以下のような発話が成り立ちにくいのかという現象についても説明がつく。

(34) \*明日学校に行くか。(↑)

(35) \*ここに誰が来るか。(↑)

(34) について言えば、いわゆる丁寧体(デス・マス体)で質問をする場合とは違い、「か」が使いにくい。実際、丁寧体で言わないような場合(友人同士などの会話)であれば、普通は「か」を付けない「明日、学校に行く(↑)」という表現が選択されるであろう。日本語教育においても「明日学校に行きますか(↑)」に対するカジュアルな表現は、「明日学校に行くか(↑)」ではなく、「明日学校に行く(↑)」を導入する。(34)が容認される場面としては、話し手が男性であるとか、詰問のようなニュアンスを帯びるといような限定が付くのであるが、それはなぜなのか。日本語の疑問文は、平叙文に対して語順の移動も起こさず、文末に疑問の助詞を付ければよいという、統語的に言えば極めて単純な構文である。そのような原理に則って論理的に構成されている構文であるはずなのに、(34)が一般的な質問文となりにくい理由は、「か」を疑問の助詞であるとしている限り、統語的には説明がつかない。

なぜ(34)(35)が自然な発話とならないのかと言えば、それは文末の「か」は終助詞ではなく、補文化辞の「か」であるからだと考えられる。実際、この二つの文は、

(36) 明日学校に行くか 聞いてみよう。

(37) ここに誰が来るか 知らない。

というように「か」の後に述語が来ると安定する。一方、以下のように

(38) あなたは学生ですか(↑)

(39) 明日学校に行きますか(↑)

のように「です」「ます」の後の「か」は、終助詞の「か」であり、補文化辞の「か」とは性質を異にする。(34)(35)が適格な文となりにくいのは、このような終助

詞としての「か」の解釈がなされにくいからだと考えられる。

さて、このように考えると、冒頭に挙げた以下の文についての「か」と「と」の連続した形式について、どのように解釈されるべきかの道筋は見えてくるであろう。初めに述べたように、「文の終わり」ではないことを示す補文化辞が二つ置かれると考えることは合理的ではないため、「とか」「かと」は、一方が補文化辞で他方が終助詞化したものと考えられる。周知のように日本語の文末表現は大きく命題的要素とモダリティ的要素に分けられるが、語順はモダリティ的要素の方が文末に位置する。換言すれば補文化辞と終助詞であれば、終助詞の方が最後尾に来ると考えられる。したがって、

(1) 明日のお昼には各地で大雨になるかと思います。

(2) 日本の学校にあるようなクラブ活動は、外国にはまずないとか。

について説明を与えるならば、(1)の下線部「かと」は、「と」が思考動詞「思います」の補語となる典型的な補文化辞の役割を果たしており、「か」はその引用文の文末に置かれる終助詞ということになる。言うまでもなく、引用の助詞「と」が率いる文は、連体修飾節内の構造とは異なり、あらゆるモダリティ的要素を承接する。前掲の例で、

(13) \*いつ大雨になるかと思いますか。

のように、補文化辞「と」が率いる文が疑問語疑問文である場合、非文となったことから考えられるのは、「か」は疑問語と呼応関係を持つ補文化辞であるということである。前掲の例で、

(35) \*ここに誰が来るか。

が質問文としては非文であるのは、疑問語と共起する「か」は補文化辞として解釈されるために、文末の「か」は終助詞ではないことから、非文となったのである。このときの「か」は補文化辞として承前の動詞を引き受け、体言としてひとまとまりの節にまとめあげ、そして、そこが「文の終わり」ではないことを示すという補文化辞となる。したがって、

(40) ここに誰が来るのか。

のように「の」が挿入されると、ひとたび、質問文として解釈されやすくなるのはなぜかと言えば、補文化辞としての機能を「の」が引き受けているために、文

末の「か」は終助詞として機能しうる環境にあるからだと考えられるのである。

また、(2)における文末の「とか」は、「と」が補文化辞で、「か」が文法化した終助詞の「か」となる。このときの「か」の意味機能は、いわゆる典型的な疑問の助詞とはなっていないことからわかるように、前掲の(24)～(31)で見たような、多分に文法化した終助詞の「か」であると考えられる。

## 5. おわりに

補文化辞「か」と「と」が、「文の終わり」であるかのような位置に生起するということから、それが文法化して、モダリティ的要素を備える終助詞へとなる過程を考えてみた。まさに「文の終わり」という統語的な位置関係が、終助詞化を促すというわけである。形式に対して、意味解釈を施すのは言うまでもなく話し手(聞き手)である。補文化辞は機能語の最たるものであり、形式自体には実質的な意味内容は無であると言っても過言ではない。意味的に無であるがゆえに、補文化辞はやがて終助詞と化してモダリティ化すると、そこに乗せられる意味機能は多岐にわたって広がりを見せる。「か」と「と」の形式には、補文化辞の「か」と「と」と、その補文化辞から文法化した終助詞の「か」と「と」の二種があり、それを区別することによって、例えば統語的には説明のつかない疑問文の構造を説明できることを見た。

言葉は、書記された時点でそれはもはや「生の」言葉ではない。昨今は通信手段や通信機器の飛躍的な発達によって、およそ数十年前には考えられなかったような言葉の実体化が可能となっている。例えばメールやツイッターに見える文字、表記、記号は、まさに発話者の声がありありと聞こえて来そうな勢いを持っており、よく言えばリアルな言葉、悪く言えば言葉としての品格を失っているようにも言える。しかし、古来より書記言語こそが正式な、それこそ真の「正しい言葉」であり、一方で口頭による音声言語は、目に見える形としては残らず、その場一回限りの、整っていないものでもあるため、書記言語よりは数段低いものと見なされるのが常である。

「か」と「と」が疑問の助詞、あるいは引用の助詞として考えるのは、古来の言葉の研究において、文献から見て取った解釈であることは言うまでもない。した

がって、「明日学校に行くか（㉮）」が人によっては適格な疑問文であると認識されることがあるとすれば、それは、書記言語としての形が脳裏にあり、書記言語風の硬い表現として、認識されているように思われる。あるいは、本稿で述べたような文法化した終助詞としての「か」（例えば終助詞の「ぞ」のように使用者が男性に限定されるようなもの）であると考えれば、非文とは言えなくもないであろう。しかし、「か」の原義が終助詞ではなく補文化辞であると考えることによって、「明日学校に行くか（㉮）」の発話の不自然さは首肯できるのではないだろうか。

Hopper and Traugott (1993) も指摘するように、文法化は言語の普遍的な現象として、実質語だったものが機能語化すること、また、機能語であったものがより機能語化することを指す。本稿では、まずは機能語の最たるものと言ってもよい補文化辞（広い意味では命題的要素をもつもの）が、より話し手の発話意図や情意に関わるモダリティ的要素をもつもの、つまりは終助詞へと、さらに変化を遂げているのではないかと考えてみた。補文化辞に相当するものがことごとく終助詞と化している要因を見出し、これも一種の文法化であると考えてみた次第である。

### 引用文献

- 池谷知子 (2011) 「引用形式をとった話し言葉のモダリティ—コンビニに行こうっとの「ッ」は何を表すのか—」『文林』45. 神戸松蔭女子学院大学
- 加藤陽子 (2010) 『話し言葉における引用表現—引用標識に着目して—』くろしお出版
- 土井忠生 (1958) 「格助詞—の・が・な・つ・だ・い・を・に・と・へ・より・よ・ゆり・ゆ・から・て—」『国文学解釈と鑑賞』第23巻4号. 至文堂
- Paul J. Hopper and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press. (日野資成訳『文法化』(2003)九州大学出版会)
- 荘司育子 (2012) 「助詞「に」の統語的性質について—補文化辞の観点から—」『日本語・日本文化』第38号. 大阪大学日本語日本文化教育センター

<キーワード> 補文化辞、文法化、疑問の助詞「か」、引用の助詞「と」

## Grammaticalization of Complementizer '*ka*' and '*to*'

Ikuko SHOJI

Complementizer is defined as a syntactic marker, which represents not to close the sentence but to follow other words and phrases. Because of being located in the end of a sentence, the complementizer will have potential possibility to become a sentence final particle.

Each particle '*ka*' and '*to*', which is belong to the complementizer, has eventually grammaticalized into a sentence final particle which contains some meaning of modality. Besides '*ka*' and '*to*', almost particles which attached to the dictionary form of verb have function as a sentence final particle indeed. It does not seem that it is a result of coincidence.

Particle '*ka*', which is generally called a particle of the question, does not always appear as a question marker. Most of them are not related to the question. These phenomena show a case of grammaticalization of complementizer '*ka*'.